

モスクワは涙を唄わない

昭和56年度文化庁芸術祭優秀賞受賞 ◆ 81年米アカデミー外国語映画賞受賞



涙の数だけ幸せになれたらいいのに...



オープニング記念
1月29日(金)ロードショー

新宿コマ劇場向い・ミラノ座横3F (232)9274

シネマスクエア
とうきゅう

(上映時間)				
日・祝	9:30	12:30	3:30	6:30
平日		12:30	3:30	6:30
レイトショー(金曜日・土曜日) PM 9:20				

〈全席自由定員制〉 ※満席及び上映中の入場はできません
〈入替制〉

特別鑑賞券1200円発売中
(当日1500円均一の処)

青春の夢を賭けて、モスクワにやって来た3人の娘たち。性格も考え方も生き方もことなる彼女たちは、それぞれ、どんな幸福を求め、どんな人生を歩んでゆくのだろう。

よろこび、悲しみ、そして、愛が、モスクワの街を舞台に展開する。モスクワは涙を信じない。は、ひたむきに生き、さまざまな恋に揺らぐ人たちの感情を、ある時は激しく、ある時はナイーブに、情感をたたえて描き出した傑作である。しかも、洒落たタッチの中に、結婚・家庭・社会といった、女性が否応なく直面せざるをえない切実な問題も、鋭く描き出している。

物語は、1958年、モスクワからはじまる。女子労働者寮に住んでいるカテリーナと、リュドミーラと、アントニーナの3人は、職場こそちがうが、大の仲良し。カテリーナは、努力型の才媛タイプだが、その年の専門学校資格試験に失敗して落胆している。アントニーナと、リュドミーラは、来年こそ必ず入れると言って、彼女を励めている。

リュドミーラは、何事にも明るく積極的なタイプ。「モスクワには、有名人や芸術家が沢山住んでいるわ。賭けるなら夢は大きく」とばかりに、ハイ・ソサエティの男を通して、成り上がろうとしている。

アントニーナは、典型的な良妻賢母のタイプ。彼女は、建設現場で仕事をしており、恋人のニコライも、同じ職場で働いている。彼は、控え目で誠実な人柄であり、二人は、やがて結ばれることだろう。

そして、青春時代から、ほぼ20年の歳月が流れた時、彼女たちのひとり、傷つき、ひとり、平穏な幸せの中にあり、ひとり、新しい愛を手に入れようとしていた。

81年3月31日、ロサンゼルスでのミュージック・センターで開催された、第55回アカデミー賞授賞式。その席で、外国語映画賞に輝いたのは、下馬評の高かった、黒沢明監督「影



スタッフ ● キャスト

製作……………モスフィルム
脚本……………ワレンチン・チェルヌイフ
監督……………ウラジーミル・メニシヨフ
撮影……………イーゴリ・スラヴネヴィチ
音楽……………セルゲイ・ニキーチン
美術……………サイド・メニャリシチコフ

カテリーナ……………ヴェーラ・アレントワ
リュドミーラ……………イリーナ・ムラヴィヨワ
アントニーナ……………ライサ・リャザノワ
ゲオルギー(ゴーシャ)……………アレクセイ・バターロフ
アレクサンドラ……………ナターリヤ・ワヴィーロワ

〈カラー作品〉ソビエト映画
配給 ● 東映ユニバースフィルム㈱



■優秀映画鑑賞会推薦 ■日本映画ペンクラブ推薦

武者、フランソワ・トリュフォー監督「ラスト・メトロ」(日本未公開)の、いずれでもない、この「モスクワは涙を信じない」だった。新しい愛の映画が誕生した。80年、ソビエト国内で公開されるや、公開5ヵ月にして、なんと6900万人という、ソビエト映画史上最高の観客動員に成功、大ヒットした作品であり、ソビエト映画のバスターワン「スクリーン誌」にも選出された。

監督は、俳優出身のウラジミール・メニシヨフ。演出第2作目であり、シナリオのウラジミール・チェルヌイフとは、自らの出演映画「自分の場を得た人」(73)、「自分の意見」(77)に続いての3度目のコンピである。

主演のウエーラ・アレントワは、子供時代から、芝居が生活の一部とも言えるような役者の家に育ち、当然のことのように女優となった。モスクワ芸術座附属演劇学校を卒業後、プーシキン名劇モスクワ劇場に入って、現在、その中心メンバーだが、映画には、この作品が初出演。リュドミーラ役のイリーナ・ムラヴィヨワは、モスソビエト劇場の女優だが、映画にはすでに10年のキャリアがある。

彼女の喜劇的センスと、いきいきとした陽気な演技が、「モスクワは涙を信じない」の中で注目を引いている。

また、カテリーナの恋人ゴーシャを演じて、印象深いアレクセイ・バターロフは、「戦争と貞操」(57)などで、日本でもおなじみの著名な俳優だが、映画監督としても、その手腕は高く評価され、「外套」(59)、「三人のデブ」(67)、「賭博者」(73)などの作品があり、ロシア共和国功労芸術家のひとりである。

MOSCOW Does Not Believe in Tears



吉田 真由美さん評 〈映画評論家〉

待ってました！ 現代女性の息づかい・生活感・人生観がイキイキ躍動する、フェミニズム映画の大傑作。

岸田 文絵さん評 〈ノンノ編集部〉

時々声をだして笑い、時々そうだそうだとうなずき、時々涙を拭き、最後に心の中で大きな拍手を送り、幸福な気持ちで帰りました。

長塚 杏子さん評 〈映画評論家〉

筋書きがいい。演出がいい。女がいい。男がいい。映画には国境がない。現代の世界の誰もが身につまされる快作。